おすすめの一冊

アルバート・アインシュタイン／ジグムント・フロイト『ひとはなぜ戦争をするのか』

この本は、アインシュタインとフロイトの書簡で、解剖学者の養老孟司氏と精神科医の斎藤環氏が解説を加えている。1932年に国際連盟がアインシュタインに依頼した提案で、「今の文明においてもっとも大事だと思われる事柄を、いちばん意見を交換したい相手と書簡を交わしてください」。選んだ相手はフロイト、テーマは「戦争」であった。2人のユダヤ人が人間の本性について真摯に語り合う、時代はちょうどナチの勃興期である。21世紀、ひとは戦争をなくせるのか？

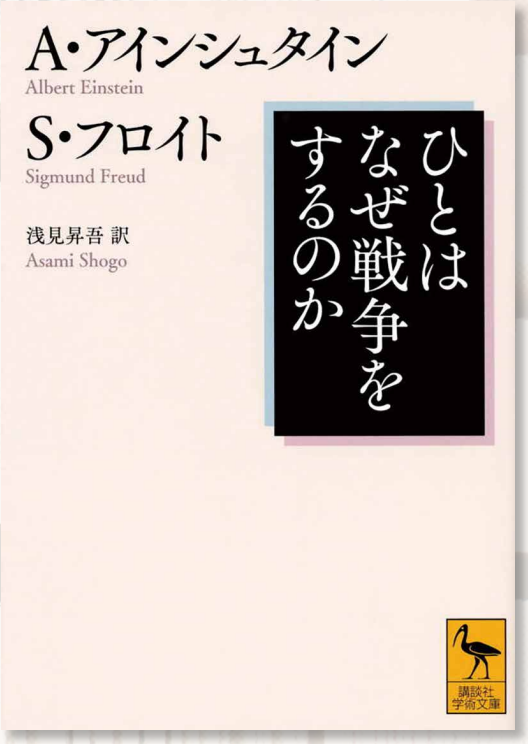
物理学者アインシュタインは、心理学者としてのフロイトの意見を聞きたかったのだろうと推察される。国際連盟、そして現在の国際連合が存在していても、いまだに平和が訪れていないのは、人間の心理に問題があることになる。最終的には社会が「文化的」にならない限り戦争は終わらない。

現在は格差社会であり、すべての人が文化的になるのは難しい。人間には本能的な欲求として、相手を絶滅させようとする欲求が潜んでいるとアインシュタインは述べている。それにフロイトは全面的に賛同し、人間には無意識的に破壊欲動が存在するとしている。「人間から攻撃的な性質を取り除くなど、できそうにもない。」

とはいえフロイトは、個々の人間が上記のような欲動を抑制するためには、1つは知性を強め欲動をコントロールすること、2つ目は攻撃本能を内に向けることとしている。この2つがすべての人間に共通した認識になるのに、どの程度の時間がかかるのかはわからないとも述べている。

私は小児循環器専門の医師で、学校保健との関わりが長く、大学病院に勤務しながら学校医を20年間務めてきた。現在、私が取り組んでいる「いのちの授業」は8年目になるが、子どもたちに「いのちの大切さ」を学校の先生方と一緒に教える取り組みである。これまでに小・中・高校、大学で10回ほど実践してきた。戦争を題材にすることは皆無だが、種々の重症疾患と移植医療を題材としてきた。人との絆を大切に、相互に意見交換をすることで、知性を高め自問自答し、自分と異なる意見に傾聴しながら、自分が納得できる自分自身の解答を得ることに役立っているように考えている。戦争で人が亡くなることは、病気で人が亡くなることとは大きく異なるが、「いのち」を考える際には共通した観点が存在するように思われる。

未来を支える子どもたちの思考を大切に育てることは戦争のない社会を築くことにも通ずることだ。そのような観点からも一人の大人として、診療と教育を通じて残りの人生を子どもたちとともに歩んでいきたいと考えている。



ひとはなぜ戦争をするのか
アルバート・アインシュタイン／ジグムント・フロイト
（浅見昇吾訳）
講談社学術文庫

土井 庄三郎
どい しょうざぶろう

1982年東京医科歯科大学医学部卒、関連施設で研修終了後、大学病院に25年ほど勤務し学校医を兼任。2020年より国立病院機構災害医療センター院長を務め、現在は名誉院長、東京科学大学客員教授として、東京医療保健大学で学事顧問として教鞭を執り、外来診療を4病院で継続している。